

# 常世憧憬の周辺 山崎正之

海の持っているイメージには、さまざまな相がある。ある時は激しく、ある時は優しく、また時には一人のなつかしさをたたえてひとの心をゆり動かす。いっときとしてとどまることなく打ち寄せる波の響きは、そのまま往古のそれを伝えるものとして、海に對う者の興味を更にかきたててやまない。

わが上代の人々は海を指して「ワタツミ」と呼んだ。和多都民・和多都美・綿津海・和多都弥・少童・海若・海童といった書き様が記紀・風土記・万葉集などに見出すことが出来る。が、本来その言葉は単純に海を指示したのではなくして、「ワタツミ」の「ミ」は神靈の意であり、それは海、神という意味において在った。それからやがて海自体をあらわすようになったのだろうが、なお「ワタツミ」と言えばその背後に神靈の宿るひろがりとしての海を見ていたのではなかったか。上代の人々は、自分たちを取りまく自然に對しいい知れぬおそれを感じ取っていたであろう。たとえば自然の暴威——それは十分に神の存在を信じさせるに足る、まさに圧倒的な

事態であったに相違ない。あるいは豊饒なみのりには、畏敬の念と共に感謝の祈りに頭を下げたことであろう。その何れにしても、自分たちの能力をはるかに凌駕するものの前に、古代人はひたすらな順を誓っていた筈である。

日本人にとって海は最初の自然であった、といっているのではあるまいか。それは日本が島国であるという以上に、われわれの祖先が海を越えてここに住みついた経緯の中にあるとしなければならぬ。いつの頃に、どこからやって来たのか、むろん決定的なことは言えるわけのものではないが、稲作の上陸と思ひ合わせてみてもきわめて至当な推測であるだろう。

かつて柳田国男は学生時代の一夏を三河の伊良湖崎で過したおり、その波打際に椰子の実の打ち上げられているのを見て新鮮な驚きを覚えたといい、はるかに祖先のたどり寄った日のことどもに思いを馳せたのであった。後日、その話を聞いた島崎藤村が、そこから詩想を得て

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実ひとつ

ふるさとの岸を離れて

汝はなれそも波に幾月……

とうたつたのは、あまりにも有名な話である。

海の彼方から異郷の人となり、やがてその土地に生涯を終えたわれわれの祖先の霊は、思慕してやまなかつたであろう見はるかす水平線の果てのふるさとに還つたと信じた。最初の人々にとって、寄せては返す波の動きそのものがふるさとと自分たちとを結びつける確かなあかしであったと思われる。とするならば、次の世代以降の人々には、父祖の霊との交会は海をおいてはなかつたのである。

自然の神霊とみずからの祖霊と、上代人の海のイメージは次第に高潮しておのずとひとつの志向する世界を創造して行った。

「海岸に村づくりした祖先の、亡き数に入つた人々の霊は、皆生きて遙かな海中の島に、唯稀にのみあるものとせられてゐたのである。さうして、児孫の村をおとづれて、幸福の予言を与へて去る」のだ——折口信夫は琉球宗教におけるニライカナイ（元、村の人々の死後に霊の生きてゐる海のあたりの島）の信仰の展開が、本土のトコノクニと呼ばれる上代思想に非常に密接な関連のあることを証明した（全集第二巻「古代生活者の研究」）。このような折口の指摘は、上代日本人の思考内容の解明と同時に、彼らの行動径路を察知させる一助としても、まことに重要な示唆に富むものと信える。

祖霊は、いつかまれひと神となり、初春には村々にその年の喜びごとを授け歩くものと信じられた。すなわちニライカナイ——「死の島」は、楽土——トコヨの相のうちに吸収され、かけがえのないものとして上代人たちの生活感情に深い根をおろして行つたのである。そうした神々の来臨と現実生活における季節との結びつきにより、そのまま農耕儀礼と重なりあつていわば主調低音の如く受け継がれたといつていい側面と、一方に楽土へへの限りなき憧憬をこめて具体的な交渉・交流を希求して来るようになる側面とを見せて来る。後者の場合、中国の民間道教によつてもたらされた神仙思想と融合し、急速に身近な印象を感じ取るという事態が起つて来たのだ。富と齡（ヨワイ）と恋愛と、折口によれば、ニライカナイの理想国としての内容は既にそれらを充たしているものの如くであるが、そこはあくまでも神霊の地であつて現実の交渉の思い及ぶ範囲ではあり得なかつた。ひとくちにいって神仙思想の魅力は、生身の人間の交歓が期待出来るような気配をうかがわせたところにもある。

浦島子伝説を人々はどうのように受けとめたのであろうか。万葉集の場合では、帰郷した浦島子が最後には息絶えたと伝える。浦島子伝説には種々な型があるのだが、その何れにも共通していることは、けつして自ら求めてワタツミの神の宮殿（＝竜宮＝常世郷）を訪れたのではない点であり、戦前の小学唱歌のように悪戯されていた亀を助けたことによる報恩などではさらにない。一介の漁夫である彼の日常生活の回転のなかで、ある日ふつてわいた如くにおき

た、それは事件であつた。しかも常世で得た富と齡と恋愛(結婚)との歡樂の生活にひたり切ることができず、再び郷里に戻る意味は何であつたのか。玉匣から昇つた白煙(白雲)が、常世辺に流れたおもむきはその白煙こそ浦島子の常世人としての靈魂をあらわしたものにほかならず、かくして顯し身に變いかかつた現実の時間経過の堆積にたえられないままに、浦島子は果てるべくして果てたということになるのだろうか。ここには浦島子自身の憧憬にもとづくものも、浦島子に托すことによつて充たされるであろう期待も、何ひとつとしてありはしない。常世郷滞在時において「老いもせず、死にもせずして」過したとは紛うかたなき神仙思想の反映ではあるが、それもそこまでのことにとどまつてしまい、更に展開の様相を示すことはないのである。ひとつには、窪田空穂のいう歌い手である高橋虫磨の批判精神の所産(評釈)だとしても、対置されるものが「須臾は家に歸りて 父母に 事も告らひ 明日の如 吾は来なむ……」では、常世の歡樂もしたもとの印象の方が強く残りそうではないか。素朴には違いない、しかし素朴なら素朴なりに常世への憧憬がより切実にとらえられて来ていい筈のものである。その限りでは、浦島子伝説の系列に属する伝承例で海幸彦、山幸彦の物語の方が、未だ神仙思想の入りこんでいない内容であっても、神性の存在という特異さも加わつて浦島子以上に海神宮訪問の動向自体に直接的な役割を課している点で、むしろ単純な受容を可能にしていたであらう。

垂仁紀九十年の条に、天皇が田道間守に命じて八常世国Vへ非時

香菓を求めしめたとあり、九十九年に天皇崩御、翌年に田道間守は常世国より帰国し、非時香菓は持ち帰つたものの遂に空しかった結果に御陵の前で叫び哭いて自殺した。はるかな憧憬の地は、難行苦行を伴つてもとにかく往來のできる場所として認められたのである。そのことはまさに画期的な意味を持つたに相違ないと思われるが、命じた天皇の手にその香菓がわたらずして終つたところに、八常世国Vのやはり遠々しい実態を明確に示していると考ええる。非時香菓は八常世国Vの仙菓であらう。天皇の權威を以つても成就し得なかつたのだ。田道間守の苦勞は、従つて彼の自殺によつても知れるようにまつたく徒らなものでしかないことであつた。神仙的な異次元の様相を呈する要素はなくとも、現実の人間には到底手のとどかない世界であるという状況だけは正面にすえられているのである。

話を浦島子伝説にもどせば、雄略紀二十二年秋七月には丹波国余社郡管川の人である瑞江の浦嶋子が船で釣をしている時、大亀があらわれてたちまち女性となり、浦嶋子の妻となるや共に海に入つて蓬萊山(トコヨノクニ)に到つたとの伝えを記している。そこに「語在別卷」とあつて、なお詳細な内容の存しらしいことを思わせるのであるが現在では知るすべもない。が丹後国風土記逸文に見える条のものがほぼそれに近いとされているようである。雄略紀の場合もそうだが、この風土記でも全体から受ける印象として神仙的傾向がまことに濃厚なのである。いまそれらを委細に追つて余裕はないが、五色の亀より化した女性性は「天上仙家之人」といい、彼女

の導く海中の蓬山の状況は天上界のそれと混融しており、やがて神靈の天上界に位置して行くそれは過渡的現象ともいうべきものなのかも知れないと思う。仙衆の堅子として昂星（すげほ）や畢星（あめふり）などの登場が、大変に特異であることを指摘しておきたい。浦嶋子（風土記では嶋子）は玉匣を開いた後も、死に至ることはないのである。瞬時にして若々しい肉体は匣より出た白雲と共に蒼天に飛び去ってしまい（つまり彼は老いさらばいた姿態になったのであろう）、三百余歳の現実の直面させられるところまでは同じ経過である……。

還、復び会ひ難きことを知り、首を廻らして窺み、涙に咽びて徘徊りき。ここに、涙を拭ひて哥ひしく、

常世べに 雲たちわたる

水の江の 浦嶋の子が

言持ちわたる

神女、遙に芳しき音を飛ばして、哥ひしく、

大和べに 風吹きあげて

雲放れ 退居りとも

吾を忘らすな

嶋子、更、恋望に勝へずして哥ひしく、

子らに恋ひ 朝戸を開き

吾が居れば 常世の浜の

浪の音聞こゆ

そして、この後に時人の歌（玉匣を開かなかつたならば、再び逢えたであろうものを、の意）がそえられている。

常世からの波の打ち寄せる海岸で、今や二度と戻り得ない神仙郷

に憶いを馳せながら、涙と共に歌う老いた浦嶋子、その歌に唱和してはるかなる天界より女神のうるわしい声音が聞こえて来るのだ。離れていても私を忘れないで欲しい……。浦嶋子はおもいあふれて、あなたにあこがれ朝になって戸を開くと、常世国の浜に打つ波の音が聞こえてくる——、とうたう。

現実の世界と常世国と相い対して歌を唱和するという構想は、再び求めてもその願望の達せられる筈のないいわば断絶の理想郷（常世国）との連続を意味しているもので、新しい文芸的契機の提示としてとらえることが出来るであろう。常世帰りの浦嶋子を死に至らしめなかつた語り様は、そのことだけでも従来の常世観とまったく異なる見解にたっているといえよう。

関敬吾氏の編集による「日本の昔ばなし・(Ⅲ)」(岩波文庫)に収録されている香川県仲多度郡の「浦島太郎」では、帰郷の際に三重ねの玉手箱をもらい受けるが、「途方にくれたときにこの箱をあけるがよい」と教えられたという。あけてはならぬと言われた禁を犯して開くと、あけることのとめられていない場合とで、語られる内容に大きな断層の生じて来ることは当然であろう。あけることが禁ではなく、むしろそこに積極的な救済すら感じさせるではないか。三重ねの最初の箱には鶴の羽が入っている。中の箱からは白い煙が出て浦島は老翁となり、最後の箱には鏡が入っていておのれの老いの顔を見やっていると、鶴の羽が背中についてしまう。鶴となり飛行する浦島、一方に乙姫は亀となって浜辺にあらわれる——むろんここにおける鶴と亀という組み合わせには、そのことによる別箇の脚色意図がはたらいた結果を予測させるものがある。とどのつまりこの昔話では、「鶴と亀とは舞をまうという『伊勢音頭』は、

それから出来たものだそうである」と結ぶところにこそ、実は語り  
の流れが一番の原因があると考へる。たとえば話の中で、飲薬をつ  
くす異郷の生活も「乙姫さまやきれいな娘もたくさんいるし、着物  
を着かえさせてくれるしするので、おもわず竜宮界で三年という月  
日がたつてしまった」という程度のもに過ぎず、更に禁を犯して  
玉手箱を開くヤマ場を持たないことも加わつて、話の焦点はズレ、  
総体に瘦せた印象が否めないのである。

いま一つの鹿児島大島郡の「浦島」では、その骨子はほとんど  
記紀の海幸彦、山幸彦の物語に共通する。兄の釣針を失つた為に見  
から多額の金銭を強要され、それに応じきれないので是が非でも釣  
針を探し出さなければならず途方にくれる——とは如何にも時代の  
様相の差を感じさせる。シホツチの老神にあたる白髪の老人の背中  
に乗つてにら（土地の言葉で龍宮のこと。何となく琉球のニライカナイを  
思い出させるではないか）の世界を訪問するが、乙姫はまったく登場  
せず、「遊びの場所ばかりに案内され……ど馳走にな」って三日を  
すごした、と思つたのが人間界の三百年、という時間経過もかなり  
性急な設定である。それはともかく、訪問の目的であつた筈の釣針  
の一件に関しても触れるところのないままに、望郷の念とどめ難く  
再び老人の背に負われて戻るので。別れる際老人から「年とらぬ息  
をこめた小箱」を受けるが、この話では開いてはならぬ禁（開くと  
難儀するよ」という言葉がおもしろい）を踏まえて、それを破るヤマ場  
はこれまで通りの話型といつていいだろう。（キセルの先であける  
ことの趣向は、何か特別な意味を汲みとるほどの挙動ではないのだ  
ろう。）興深いのは、小箱から出た煙のつて浦島自身が天に上る  
と伝へるのである。煙と共に老人の姿になつたともいわず、常世辺

への憧憬の心情はここではもはや消滅しているとみてよいのである  
う。天上界めざす浦島のありようは、上述した丹後国風土記逸文に  
おける昂星や畢星などの登場と思ひあわせるとき、そこに一連の傾  
向の存在をおさえて行くことが出来るように思う。

浦島子伝承のベースは、その場所の何れにあろうとも海にむか  
つての異郷憧憬の切なるものを秘めた浪漫的な心情の裏うちによつて  
支えられて来た。中国を含めて異郷説話のほとんどが何らの具体的  
効果をもたらしたとはいへず、むしろ異郷の飲薬の短かさに対し  
て現実の時間経過の比較にならない重みを主人公に容赦なくのしか  
けて行くのである。

△常世Ⅴの相貌が副次的な位置に移行させられた系列をここにみ  
るわけであるが、他方、神武記紀のなかでの「常世渡り」には、最  
も基本的と思われるあり方がうかがえるように思う。即ち古事記で  
は上巻末にウガヤフキアヘズの命の系譜を記すが、そこに、  
故、御毛沼命は、波の穂を踏みて常世国に渡り坐し、稻米命  
は、妣の国と為て海原に入り坐しき。

とあつて、常世国も妣の国も海そのものと結びつき殆ど同様の事態  
を示したものの如くである。ただ「波の穂を踏みて……渡つた」ケ  
ースと、「海原に入」つたケースでは、あるいはそこに常世国と妣  
の国といった意識の相違が認められていたのかどうか。

神武即位前紀によれば、いわゆる神武東征行の途次にいま一息で  
大和に入るところまで来てナガスネヒコの強力な抵抗にあり、長  
兄のイツセの命をうしなつた。日にむかつて弓を引いた罰と感じた  
皇師は、日を背に戦おうと紀伊半島を東に巡つた時、熊野の沖合で  
の出来事であつた。

東征の成就是、神々の庇護なくしてはあり得なかつたのだが、そうした経緯の未だ何一つ生起して来ない状況の間において、難波の道程から脱出せんものと暴風雨のさなか、同時にとられた行動であつた。神武東征行そのものが色濃く神話世界の連続意識に契つており、以前にオホクニヌシの神と国土経営にあつたスクナヒコナの神が、ある日突如として常世国へ去つたと伝える語りくちと、それは何ら変わるころがないといつていいだろう。これら古典のうちにとどめられた八咫の国V・八常世国Vへ渡り行くありようは、まさしく一回性の姿としてのものであり、きわめて限定された場を示すものである。

神話伝承のうちに定着した種々多様な現象の一回性が、後代に繰り返されて来るある事態との関連で解釈を加えられることは多くみられよう。起源の持つ特別な意味あいを強調する精神の所産である。今となつては起源の位置づけに腐心するばかりであるが、定着している事実の前には工作の余地はないのだ。

熊野の沖合は、そのことからして八常世国Vへの道筋として確たるところとなつたのである。南紀の突端はこの地のつきたさいいはての場所として認められ、そこにあらたな心情のおこり来る理由も理解できよう。

その視界全面にひらけた水平線一条、それと接しては、五センチほどにも見える部分がぼうと明かるんだ白色の帯となつてくつきりと映えている。一点の雲もない碧空にかかる朝の陽の輝きのなかに、私自身これまで経験したことのない海あなたへの思慕を覚えたことであつた。あの明かるさの中に身を置いてみたい、衝動的

に私は海にむかつて走り出してた。ほとんど波頭をたてていないひろがり、そのまま青畳のように歩いて行けるのではないかとさえ思われた。

補陀落渡海——平維盛の入水——。彼らの見た海も、おそらくこうした状況の海原ではなかつたであらうか。

フダラク浄土を求めて、生きながら、至ることを冀う心境は、イメーシの違ひこそあれ八常世憧憬Vと軌を同じくするものと考えられる。伝えられる話では、マナシカツマという船によつたとある。渡海する者を個室にあるように閉じこめた形に入れ込んで、帆をあげて一踏水平線にむかうのである。山幸彦がシホツツの老神によつて教えられ海神宮殿を訪問する船もそうであり、浦嶋子伝説によつては、自分が案内するあいだ目を閉じていてほしいという乙姫の言葉が語られているのである。現実のワクを飛び出して、ことあらたな神怪の世界に入ろうとする際に、必ずといつていくらい組みこまれる手続とみるべきものだが、視覚の活動に基礎づけられているわれわれの日常性を断ち切る要請は、一方に生ける身があるために一層の現実感をさそうと言へる。

山の彼方にあこがれる心情も、また一望千里の地平線の果てにあこがれる心情も、それぞれに人々の思いをながく掻き立てて来たことは、いまあらためて指摘するまでもない。それらと水平線のつきるところに求めようとする意識とは、おのずから質の異なるものがあると思う。異郷観念の最も具象的なイメーシは、地の続きのうちに認めるよりも、地を断つてまったく別様の世界を想定する時にこそ、あざやかな特色を發揮して来るもののように考える。